様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１８５３７

研究課題名（和文）西北タイ歴史文化調査団蒐集8mm動的映像の「再資料化」と動的映像資料活用法の研究

研究課題名（英文）Re-documentation of 8mm moving images collected by the Northwest Thailand Historical and Cultural Research Group and research on methods of utilizing moving image materials

研究代表者
藤岡　洋（HUZIOKA, Hirosi）

東京大学・東洋文化研究所・助教

研究者番号：８０７２３０１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：学術調査で記録された動的映像は、調査後に活用される機会がほとんどない。そこで半世紀前に日本で初めて本格的に行われ、8mmフィルム139本に記録された西北タイ歴史文化調査団の調査記録映像を取り上げ、再資料化を通じて映像の新たな活用法を探った。調査記録映像の特徴の一つに「冗長性」があるが、本研究ではこれを積極的に評価して「時系列が保存」されている第一級資料として扱った。その上で映像分析用ツールを開発して、この調査団の調査行程の再現を試みた。この試みでは、未整理のまま博物館に保管されてきた数千枚の写真の再整理が促されるなど、映像が新しいタイプの資料インデックスの可能性を秘めていることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術調査で記録される動的映像(以下、映像)は、調査後に活用される機会がほとんどない。多くの研究室・博物館などにも同類の映像が眠っていると思われる。本研究はショット単位分析という手法で映像の資料化を試みたが、その過程で、(1)文献や写真といった他種資料が映像を中心に集積されはじめ、 (2)異分野の研究者たちとの協働分析が半自然的に発生した。その過程は時に (3)デジタルフィールドワークの萌芽と評されることもあった。この意味で本研究は学術記録映像の再資料化に新たな視座を提供したと言える。

研究成果の概要（英文）：Moving images recorded in academic surveys are rarely utilized after the survey. This study, therefore, took up the moving images recorded in 139 8mm films by the Northwest Thailand Historical and Cultural Survey, the first full-scale survey conducted in Japan half a century ago, and explored new ways of utilizing these moving images through their re-documentation. One of the characteristics of the moving images recorded in the survey is "redundancy," which was positively evaluated in this study and treated as a first-class material that "preserves the time line". We then developed a tool for analyzing moving images and attempted to reproduce the research process of the survey team. This attempt prompted the reorganization of thousands of photographs that had been stored in the museum in an unorganized state, and showed that moving images have the potential for a new type of material indexing.

研究分野：人文情報学

キーワード：デジタルフィールドワーク　西北タイ　デジタルアーカイビング　8ミリフィルム　映像分析　ゾミア　白鳥芳朗　人文情報学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学術資料として動的映像(以下、映像)が記録されてきた歴史はもはや半世紀を越える。ところが、こうした映像が実際の研究現場で活用される機会は、同じ映像資料としての写真と比較して、これまであまりに少なかった。とりわけ前世紀にアナログフィルムで記録されていた映像は、記録後に見返される機会すらほとんどなかったといってもよい。

一方で、映像を取り巻く環境は近年大きく変化した。現在、映像の記録媒体はデジタルに完全移行し、(1)インフラとしてのインターネットが十分整備された上にスマートフォンならびに動画投稿プラットフォームが普及し、(2)映像制作技術が簡便化し、さらにそれが一般化した。こうした現況下、いわゆるアマチュア動画はマスメディアはじめ学術研究にも影響を及ぼしはじめている。ただし、学術記録としての映像だけは現在でも、その活用法といえば、散発的な上映会で映写される、任意に切り取られてインサート映像として利用される、動画共有サイトにアップロードされる、などに限定されている。デジタル化すらされていない映像にいたっては、ビネガー症候群はじめ劣化・再生不能の危機に晒され、デジタル化された映像でもその大半は忘却されるのを待っている状態のものも、むしろ漸次的に増えていっている。

とはいえ、すべての学術記録映像がこうした環境に置かれているわけではない。なかには現在でも恵まれた環境のなかで保管・整理されているものも存在する。とりわけ博物館の収蔵庫には、映像がそれと関連する文書資料や写真などとともに保存される傾向が強く、奇しくも映像メディアの劣化と離散を防いできたという事情もある。こうした特徴をもつ記録映像が改めて資料化されれば、現在でも当該地ないし当該時研究にとって貴重な資料に生れ変わる可能性を残していると考えられる。調査記録映像を改めて分析することは、それに文献や写真資料同様の新たな資料価値を見出し、採掘することにつながる。

２．研究の目的

上に述べた問題意識に基づき、本研究が対象としたのは南山大学人類学博物館(以下、博物館)に収蔵されていた西北タイ歴史民族調査団蒐集 8㎜ フィルム映像である。この映像は半世紀前の 1969 年から 74 年まで当時上智大学教授だった白鳥芳郎を団長に行われた科研「メナム河上流(メーピン河)地帯における山地および平地諸民族の交錯過程の実態的調査」(海外学術調査, X441601018) の援助を受けて行なわれた全 3 回の調査のうち、1971-72 年に実施された第二次調査の調査行程を記録したものであった。対象地域であるタイ西北部山地は、現在ではジェームス・C・スコットの研究によってゾミアとして知られる。この地域に関する調査は、松本信弘(1959 年)や梅棹忠雄(1964)らによる先行調査事例はあるものの近隣地域に留まっており、本格的な調査は白鳥らによる上記プロジェクトが本邦初のものであったといってよい。加えて、この映像は国際的にも価値があるものであった。1950 年代から国際的に展開されていた EC(Encyclopedia Cinematographica)フィルムにも当該地を記録したものがあるが、カラーフィルムによる記録は残されていない。以上の学術的背景をもつ本研究対象であるが、この調査団は映像以外にも多岐にわたる文物を蒐集した。それは稀少文書、写真、音声記録はもちろん、民族衣装、装飾具や農具などの実体資料までにいたる。果てはこの調査団は家屋を含む実体資料までをも蒐集し、分解して船便で日本に持ち帰ったという逸話をもつ。本研究対象はこうした大量の多岐にわたる資料群のなかに埋もれてきたが、2000 年に上智大学から南山大学へ大型実体資料は除く資料群が移管された際の大規模な資料再整理時にスチールフィルム写真と並行

してこの映像もデジタル化された。その際に139本の8㎜フィルムは6本のDVDに収められたが、記録時間は 7 時間以上に及び、延々と続く山並みがパンされる映像が随所に存在するなどの特徴がある。数人の研究者(当時の博物館館長である重松和男、また某私立大学教授の当該地域研究者)の散見では、この映像に意味がないとされてもきた。
研究代表者は、こうした調査記録映像は、(1)内容、(2)記録時間の長さという意味での冗長性を特徴としてもっていると仮定した。その上で、この冗長性を解消する方法を探った。冗長性が排除されれば、映像に記録された内容について検証がなされ、改めて学術資料としての価値も改めて判断されるはずである。そこで、この方法論構築そのものを「調査記録映像の再資料化」として掲げ、映像分析を行った。それはまた、今世紀から人文系研究が蓄積してきたデジタルデータベース/アーカイブ技術を駆使した、映像による「デジタルフィールドワーク」をも視野に入れた映像分析方法論の確立であった。

３．研究の方法

以上の述べた目的を達成するため、映像内情報の価値は、映像がどの村で・いつ・何の目的で記録されたのかを明らかにすることで次第に採掘されると想定し、 (1)映写しながらのインタビューを中心に、(2)(1)の内容を公式日誌とインフォーマントの個人日誌の記述とに照合し、(3)元調査団員による論述、著作 (4)南山大学人類学博物館がデジタル化した 6,713 枚のスチール写真 (5) 同博物館が所蔵するこれまでの本研究対象に関する研究資料 を補助資料としてインタビューで得られた情報の確定・修正を行うという方法を採った。
ただし、映写とインタビューのスピードはまったく異なる。そこで、映像を構成する単位を、フィルムスタディーズでの分類法に則り、情報粒度の小さなものから大きな順に(a) ショット、(b) シーン、(c) シークエンスと設定した上で、何度も繰りかえし映像を確認しながらインタビューを行い、時に(2)-(5)の補助資料分析も行いながら分析を進めた。各情報粒度の定義は次のとおりである。
(a)ショット：8㎜カメラに撮影者が指をかけシャッターを操作することでフィルムに残った「撮影開始」から「撮影停止」までの区間の映像部分
(b)シーン：(a)ショットの塊。本研究対象の場合、調査した村で発生した出来事(冠婚葬祭や農作業などのテーマ)。映像が「何を目的に記録されたのか」に相当する
(c)シークエンス：(b)シーンの塊。この調査団はゾミアの複数の種族村を移動しながら調査をしたことから本研究対象の場合、場所（移動も含む）とした。
この分析方法の場合、(a) はフィルムという物体に痕跡が残るため、デジタル解析処理で半自動的に処理できる。それに対し、(b),(c)はインタビュワーとインフォーマントとの解釈作業となる。そこで(b)(c)の情報の蓋然性を(2)-(5)すべてを動員して高めることを念頭に調査を進めていった。

４．研究成果

上に示した方法に基づく調査には、繰りかえし映像を再生し、インフォーマントから得られる情報を可能なかぎり何度も網羅し、他種資料も活用しながら多角的に情報を分析を進めたが、インタビューでの情報は多岐に及ぶ上に、映像フレーム以外の情報ももたらされる情報過多なものでもあった。そこで、これらの情報を漏らさず記録するため別途、映像分析用ツールの開発を行なった。このツールは計3回のメジャーアップデートを行ない、現在は(α)映像同士の

比較機能、(β)写真資料と映像との比較機能、(γ)映写とデータベースを別インターフェイスに分けての多人数・別場所での共同編集機能を備えている。
とりわけ(β)機能は南山大学人類学館で2000年代に完遂できなかった写真台帳の再整理を促すことになった。また、(γ)機能は本研究期間が完了しても博物館に譲渡することで研究の継続を可能にするために設けたが、奇しくも、映像分析が進むにつれ、当該地研究者や開発経済学者などの関心も引き、現在では博物館を中心とする多拠点分析の足がかりになりつつある。
さらに、この分析から調査記録映像の特徴でもあった冗長な風景映像などにも意味があったことを証明しつつある。本研究対象の場合、冗長映像部分はアナログフィルムゆえに映像自体に込めるしかなかった、その日の天候や気温や風景の特徴を記録し日付変更線の代替としていた可能性が浮上している。この一種のアナログ的な「技法」には、カメラマンそれぞれに流儀があると推察され、この点で映像制作者との共同研究の可能性も芽生えはじめている。
以上の研究成果は以下の論文や口頭発表にて行なった。

2018年度
2019年3月に京都大学で行われたデジタルアーカイブ学会 第3回研究大会にて、口頭発表「西北タイ歴史文化調査団蒐集8㎜動的映像資料の「再資料化」の試み 」を行った。発表は当該大会の「座長が選ぶベスト発表」に選出された。

2019年度
藤岡洋，レイヤー的技巧と脳内編集 ： 採掘される将来の思考のために,東洋文化100号，p.25-40，2020年3月，DOI: 10.15083/00079035，査読あり
2019年7月に東文研セミナー「往来型フィールドワークがつくる社会生活 -4-」にて新型コロナ禍で非インターネット環境下にあったインフォーマントとのデジタルアーカイビング活動について「弾道からパノラマへーコロナ禍中のデジタルアーカイビングの場合」として報告した。

2020年度
藤岡洋，更新される「記録＝記憶」に挑むデジタルアーカイブは可能か，8ミリフィルムの旅: 極私的秋田の日常，p.62-66，2021年3月，寄稿論文
2020年10月にオンラインで行われたデジタルアーカイブ学会 第5回研究大会にて、ワークショップ「8㎜動的映像のもつ資料価値を採掘する: その現状と展望」を企画し、座長を務めた。また、そのなかで口頭発表「 西北タイ8㎜資料活用のために: デジタルフィールドワークの萌芽？」を行った。

2021年度
大塚英志（編）,『運動としての大衆文化 ： 協働・ファン・文化工作』,水声社,2021年9月,ISBN: 9784801005945,共著
2021年4月にはオンラインで開催されたデジタルアーカイブ学会 第6回研究大会にて意味付の難しい風景映像が日付変更線の意味を持つのではないか、という仮説を検証した口頭発表「デジタルアーカイビングによるアナログ的「技巧」の採掘 ： 西北タイ歴史文化調査団蒐集8㎜動的映像の再資料化を通じて」を行った。

2021年6月にはやはりオンラインにて開催されたアート・ドキュメンテーション学会2021年度年次大会にて、未整理のまま保管されてきた写真資料の再整理を促し、過去の整理情報の修正を迫ることが映像分析によって可能になった事例を、映像分析法との紹介とともに口頭発表「資料インデックスとしての動的映像の可能性」として行った。
2021年7月には、やはりオンラインで行われた明日NET（第205回）にて招待セッションとして中国南部をフィールドとする民族研究者、長年タイにおける観光と民族の関係について研究している地域研究者、サスティナブルコーヒーに関しても多くの業績がある開発経済学者、元調査団通訳で日本に帰化しシャン料理店を営んでいるシャン人店主を招き、口頭発表「デジタルアーカイビングで旅することは可能か？ ~1971年北部タイの場合~ 」を行った。
2021年8月には、オンラインで行われた The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS 12) にて採択されたテーブルセッション中に口頭発表「Deep Indexing of Moving Images for Digital Archiving」 を行った。
2022年3月には、ハワイ大学とオンラインでのハイブリッド開催になった Association of Asian Studies (AAS) Annual Conference 2022 にて採択されたグループセッションで「Introduction of Digital Archiving ~ For Deep Indexing of Non-Edited Moving Images ~ 」と題する口頭発表を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 藤岡洋	４．巻 1
２．論文標題 更新される「記録＝記憶」に挑むデジタルアーカイブは可能か	５．発行年 2021年
３．雑誌名 8ミリフィルムの旅:極私的秋田の日常	６．最初と最後の頁 62-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤岡 洋	４．巻 5
２．論文標題 [11] デジタルアーカイビングによるアナログ的「技巧」の採掘：西北タイ歴史文化調査団蒐集8mm動的映像の再資料化を通じて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	６．最初と最後の頁 s1～s4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24506/jsda.5.s1_s1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤岡洋	４．巻 100
２．論文標題 レイヤー的技巧と脳内編集 ： 採掘される将来の思考のために	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋文化	６．最初と最後の頁 25 - 40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079035	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤岡 洋	４．巻 3
２．論文標題 [A33] 西北タイ歴史文化調査団蒐集8mm動的映像資料の「再資料化」の試み：データベース消費の観点から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	６．最初と最後の頁 139～142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24506/jsda.3.2_139	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 藤岡洋
2．発表標題 弾道からパノラマへーコロナ禍中のデジタルアーカイビングの場合
3．学会等名 東文研セミナー
4．発表年 2020年

1．発表者名 藤岡洋
2．発表標題 8㎜動的映像のもつ資料価値を採掘する：その現状と展望
3．学会等名 デジタルアーカイブ学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 藤岡洋
2．発表標題 西北タイ8㎜資料活用のために：デジタルフィールドワークの萌芽？
3．学会等名 デジタルアーカイブ学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 藤岡洋
2．発表標題 デジタルアーカイビングによるアナログ的「技巧」の採掘：西北タイ歴史文化調査団蒐集 8㎜ 動的映像の再資料化を通じて
3．学会等名 デジタルアーカイブ学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 藤岡洋
２．発表標題 西北タイ歴史文化調査団蒐集8mm動的映像資料の「再資料化」の試み：データベース消費の観点から
３．学会等名 デジタルアーカイブ学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 HUZIOKA, Hirosi
２．発表標題 Deep Indexing of Moving Images for Digital Archiving
３．学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS 12)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 HUZIOKA, Hirosi
２．発表標題 Introduction of Digital Archiving ~ For Deep Indexing of Non-Edited Moving Images ~
３．学会等名 Association for Asian Studies(AAS) Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤岡洋
２．発表標題 記録と記憶の位置 ： 2021年に立って
３．学会等名 立正大学哲学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤岡洋、鈴木昭夫
２．発表標題 デジタルアーカイビングで旅することは可能か？ ~1971年北部タイの場合~
３．学会等名 明日NET（第205回）
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤岡洋
２．発表標題 資料インデックスとしての動的映像の可能性
３．学会等名 アート・ドキュメンテーション学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 大塚英志　他	４．発行年 2021年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 483
３．書名 運動としての大衆文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ICAS2021
https://www.eventscribe.net/2021/ICAS12/ajaxcalls/SessionInfo.asp?PresentationID=929174&query=Archiving
AAS Annual Conference 2022
https://www.asianstudies.org/conference/schedule-at-a-glance/
デジタルアーカイビングで旅することは可能か？ ~1971年北部タイの場合~
https://sites.google.com/view/newasnet/%E3%82%BB%E3%83%9F%E3%83%8A%E3%83%BC%E5%A0%B1%E5%91%8A?authuser=0#h.eitjcvesdfgf
東文研セミナー「往来型フィールドワークがつくる社会生活 -4-」
https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/news/news.php?id=WedJul291153232020
デジタルアーカイブ学会第5回研究大会ワークショップ
http://digitalarchivejapan.org/kenkyutaikai/5th/workshops
デジタルアーカイブ学会第6回研究大会一般研究発表プログラム
http://digitalarchivejapan.org/kenkyutaikai/6th/6th-happyo
デジタルアーカイブ学会 第3回研究大会一般研究発表（概要）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsda/3/2/3_139/_article/-char/ja/
2021年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会プログラム
http://www.jads.org/news/2021/20210619-20.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	鈴木　昭夫 (SUZUKI Akio)		
研究協力者	野久保　雅嗣 (NOKUBO Masatsugu)	東京大学・東洋文化研究所・技術専門職員 (12601)	
研究協力者	高　一男 (TAKA Kazuo)	北陸学院大学・名誉教授 (33307)	
研究協力者	黒澤　浩 (KUROSAWA Hiroshi) (50387742)	南山大学・人文学部・教授 (33917)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関